

## 図書館海援隊フォーラム2014報告書

### 第1部：神代浩 vs 高橋真太郎

神代：本日は3連休の中日、しかも天気もいいので外へ行きたくなるような日にたくさんお集まりいただき、誠にありがとうございます。早速ですが、そもそも図書館海援隊って何じゃらほい？というところから、どうやってできたんだろうか？というあたりまで振り返りたいと思います。この本(「困ったときには図書館へ～図書館海援隊の挑戦～」悠光堂)に書いてあることもありますけども、ここで書ききれなかったこともできるだけ話題にしていこうと思います。高橋さん、どうぞよろしくお願いいたします。

高橋：よろしくお願いいたします。始まる前に一ついいでしょうか。

神代：どうぞ。

高橋：みなさん、この本がお手元にあると思うのですが、これは神代さんがご自身の力で仕事の合間に時間をつくって書かれたものです。ユーモアもあって情熱もあって、そういう本を書いてくださった神代さんに感謝をしたいと思っています。みなさん盛大な拍手をお願いします。(拍手)

神代：ありがとうございます。

図書館海援隊の話の前にまず私が高橋さんにお聞きしたいことがあります。それはなぜ高橋さんが図書館員になろうと思われたか？この話からぜひお願いします。

高橋：私は小さいころからずっと本を読まなかったのですが、高校1年生の夏に職場体験で図書館に行っただけです。それが香川県にある坂出市立大橋記念図書館というすばらしい図書館でした。そこで職員の方に「図書館情報大学に行きなさい」と言われてそれから勉強して図書館情報大学を目指したんです。それが図書館員になろうと思ったきっかけです。

神代：そういうすばらしい出会いがあったということですね。

高橋：はい。

神代：ありがとうございます。図書館情報大学からめでたく鳥取県立図書館に採用されたということですね。

高橋：はい。

神代：図書館で仕事されるようになってからも、おそらくいろんな方の影響を受けたのではないかと思います、いかかでしょうか？

高橋：最初は図書館の雰囲気が好きだったんですが、大学に行って初めてレファレンスというものを習って、本は読むだけでなく調べるものだと知りました。大学では歴史とか百科事典を使うような事項を調べていたのですが、調べて分かるっていうのはすごく面白いなって教えてもらいました。

公共図書館で実際レファレンスカウンターに立ったときに、いろいろな人が調べに来てくれる。こんなことが図書館で分かるんだろうかっていうことを調べながら感銘を受けて、それから調査をお手伝いすることに力を入れてがんばっています。

神代：今日ご参加のみなさんの中で「レファレンス」って初めて聞いたという方はさすがにいらっしゃらないと思います。ですけど、ちょっとピンと来ないって方もたぶんいらっしゃると思います。高橋さん流に「レファレンスサービス」を日本語で説明するとしたらどんな感じですか？

高橋：失言でした。うちの図書館では「レファレンス」という言葉ではなく「資料相談」という言葉を使うようにしています。資料を使う人をサポートしたり、調べものをお手伝いすることを「レファレンス」と言います。最近は生活に密着したことを多く聞かれます。子どもさんの名前を付けるために名付けの本を探しに来られたり、ワインの専門店をオープンするのだけれどその方法を知りたいとか、借金があっても弁護士さんに頼むお金がなくて困っているということを相談されたこともあります。本を探しているというよりも何かを知りたいとって相談に来られる人が増えています。

神代：図書館でお勤めになったかなり早い時期から、いろんな困りごとを持って図書館にいらっしゃる方々と接する機会があったということですか？

高橋：はい、利用者の方に、そういう「可能性」が本や図書館にあると教えてもらったことは大切な経験だと思います。

神代：では、高橋さんからこの段階で何か質問がありましたらどうぞ。

高橋：私は、神代さんが文部科学省の社会教育課長になられたときから知っているのですが、それまではどういうご経歴で来られたのですか？

神代：私は1986年に文部省に入りました。今まで図書館、公民館などの社会教育も関係する生涯学習関係の業務と、教育に関する国際関係の業務。OECDのPIISA(ピザ)調査とかお聞きになったことあるかもしれませんが、そのような業務を中心にやってきま

した。

高橋：著書を読ませていただくと派遣村や貧困の問題に興味があったということなのですが、これまでのお仕事とあまり関わってないですね。

神代：そうですね。これは自分自身のポリシーと言うのも変ですけど、自分の職場の中の人たちばかりとお付き合いをしているとどうしても視野が狭くなり、発想も限られてくるような気がしたので、普段から役所と関係ない人ともいろんな形でお付き合いをしようと務めてきたんです。そのせいだと思います。

高橋：そういった時に、文部科学省で図書館の担当となられて鳥取に来られたということなのでしょうか？

神代：そうですね。社会教育課長になる前の話ですが、2008年の大晦日に「年越し派遣村」が、正に今日の会場のすぐそばの日比谷公園にできたわけです。ここに派遣切りに遭って仕事をなくし、社宅からも出ていかねばならなくなり、要は仕事と住まいをいっぺんに失って困り果てた人たちが集まってきたわけです。そこにたくさんのボランティアが集まって炊き出しをしたり暖かい衣服を提供したり、仕事や生活保護の相談に乗ったわけですね。そんな光景が、大晦日の夕方6時とか7時といった時間帯、いつもの年なら家族団らんで「紅白歌合戦まであとどれぐらいかな？」などと話しながら観ているようなときにテレビの映像で流れてきたわけです。

私も正直びっくりしたんですけども、その映像を見ながら私には違和感が残ったんです。確かに、派遣村に行けば最低限の衣食住は提供されるだろう。だけどそれだけでこの人たちは本当に来年から仕事を探そうという気持ちになるだろうか。

高橋：そういうことですね。

神代：だけどそのときは私、図書館担当でも何でもないので、本当にそう思っただけで終わってしまったんです。

高橋：なるほど。それから鳥取に来るチャンスが訪れたんですね。

神代：今日も第3部にご登場いただきますが、糸賀雅児先生にお会いをして、「最近の図書館界はちょっと元気がなくないですかね？何かいいアイデアないですか？」とご相談したところ、「いやそんなことはないですよ。まだまだ全国に元気な図書館、がんばっている図書館はありますよ」ということでご紹介いただいて参加したのが「ディスカバー図書館 in 鳥取Ⅱ」というイベントだったんです。そこで高橋さんや総合司会の小林さんに出会ったということです。

高橋：「ディスカバー図書館 in 鳥取」というのは、図書館の有用性を住民や行政の人に知ってもらいたいと、鳥取県で力を入れて開催していたものです。そこに当時社会教育課長であった神代さんをお呼びしました。

こういった時に、当館ではいつも「国で図書館の担当をしている課長さんが来られるんだったら、必ず図書館のファンにして帰さないといけない」と言います。もう7～8年前の話になりますが、当時の私は経験が浅く文部科学省についてよく分かってなかったんです。そこで働く人は役人主義だと思っていて、鳥取に来たらギャフンと言わせやろうというふうにならずにずっと思っていました。

そんなある日、当館の課長が事前の打ち合わせで神代さんと電話をしていたんです。どんな電話ですかって聞くと「神代さんが、記録を取るんだったら立場上面白い話ができないけど、記録を取らないんだったら面白い話をするって言った」というんです。それを聞いたときに、あれちょっと私が思っている文部科学省の人とは違うんじゃない？と思ったんです。それから鳥取に来てもらったときに「ビジネス情報や医療情報、法律情報などは提供元がいろいろな行政部局に分かれているけれども、図書館だったらそれをワンストップで提供でき、そこが図書館のいいところですよ」という話をしたら、神代さんが「文部科学省もその縦割り行政が一番問題だ」とおっしゃったんです。その時私は、文部科学省の人が自分の省の課題を真剣に考えておられるのにちょっとした衝撃を受けたんです。

神代：よく覚えてらっしゃいますね。でも「記録取らないんだったら好きなことをしゃべる」というところがまだまだって感じですね。今から思えば、その当時はまだどこかで守りの姿勢が残っていたんですね。

高橋：それはご自身の保身のためじゃなくてご自身の立場から出る影響を考えているニュアンスでした。

神代：どうしても役所の人間はそういうことを考えてしまうのです。ただ、私自身よく覚えているのは、鳥取県立に行ったおかげで図書館の新たな可能性を強く感じて帰ってきたことです。それが2009年の11月でした。それからしばらくしてまた年末が近づいてくる。また派遣村を作んなきゃいけない。今度は厚生労働省か東京都が公設でやるのか？みたいな話になってきたときに、じゃあ図書館で何かできることありませか？と、私がその当時知り合った図書館のみなさんに投げ掛けしました。

ここから第1部の本題に入るわけですが、みなさんにお配りしております「労働者の直面する問題と図書館にできること」という1枚の紙があります。私が投げ掛けてから数時間ぐらいで高橋さんからこの紙が返ってきたわけです。

今日は、どうやってこの表を作ったのか、ぜひ高橋さんに再現していただきたいと思います。よろしくお願ひします。

高橋：分かりました。最初私が考えたのは、図書館にできることだけを書いた表だったんです。例えば、こういうふうに本が提供できますよとか、雑誌や新聞が提供できますよと

か、インターネットのリンク集も作れますよとか。でも、それでは図書館の有用性は表現できなかった。

それで悩んでいたときに2人の人を思い出したんです。1人は私が大学生のときに墨田区立緑図書館での体験学習でお世話になった山内薫さん。障がい者サービスの推進に尽力された方です。体験学習に行った初日に自転車に乗りなさいって言われて本を山のように積んで図書館に来られない人のところに持っていったんです。情報を必要とするけれども入手できない人に届けることをずっとしている人です。その時に、集団で相手を見るのではなくて一人一人のことを見てサービスを提供したというのが自分のよりどころだと考えました。

もう一つは身内の話ですが、当館の小林課長の言葉です。ビジネス支援サービスを始めた当初、図書館の内外から反発を受けた時代があったんです。そのときに小林が言っていたのは、「県民のためという気持ちがあれば何も怖いものはない」ということでした。その二つのことを考えたときにこの表には一切利用者が出ていないことに気づいたんです。

それで一度リセットをして、まず失業者が困ることは何だろうと考えてそれを書き始めたんです。それがこの上側にある黒文字の「労働者の皆様が直面する問題」になります。まず人がどういう問題に直面するかをザっと書いていったんです。そしたらそれに対してこんなことができるあんなこともできるというふうにどんどん図書館の可能性が見えてきたんです。一人一人のことを考えると図書館にできることはいくらでもあると発見したんです。

神代：分かりました。ありがとうございます。これが正に図書館海援隊が事実上誕生した瞬間だと思います。この表が出てきた。全国の図書館の中でこういうことを考えられる人がおられる。それが1人や2人じゃなくてどうやら全国あちこちにおられそうだ。

そこで今度は逆に私にできることは何かと考えました。全国の図書館で言わば「スーパー司書」的な人がいても、ひょっとしたら周りや上司に理解されずに孤立してやしないだろうか？彼らに対して「いや、他の図書館に仲間はあるよ」と伝えてつなぐ。今日は猪谷千香さんもいらっしゃるのであえて「つなぐ」とか「つなげる」とか言ってますけども、そんな形で始めたのが図書館海援隊なのです。

高橋：こういうことを一生懸命考えたのは良かったと思いますが、実際そこから動きが出たっていうのは大きかったと思います。実際最初のメールが来たのは12月で海援隊が立ち上がったのが1月5日でした。

私から聞いてみたいのは、「海援隊」というユーモアのあるネーミング。そういう楽しむ力がどこから来ているのか？そして、慣例やしがらみに囚われずそれを1月までに立ち上げたっていう行動力について聞いてみたいのですが。

神代：まずネーミングの話をしみますと、私の先輩の中にも自分が考えた企画に「奇兵隊」って名付けた人が居たんです。これは最終的に表には出なかったのですが、それでも「そうか、そういうことやってもいいんだ」と思わせてくれた。ある意味での前例があったと

というのは、役所の世界では大きかったと思います。

それを前提に、まず半分はもちろんノリです。2010年の大河ドラマはもうお忘れの方も多いと思いますが「龍馬伝」でした。しかし、残り半分は真面目に考えました。全国各地にスーパー司書がおられ、彼らは図書館という機能を使って何とか世の中を良くしたい、あるいは住民の役に立ちたいと思ってらっしゃる。私を含め彼らが図書館の枠を越え、国とか地方とか、官とか民とか、そんな立場を越えてネットワークを作る。海援隊も脱藩浪士たちの集まりだけど、幕末の危機的状況にある日本を何とかしたいという志を共有した者たちの集団です。そういう意味でも通じるものがあると考えたわけです。

高橋：反対はなかったのですか？

神代：私のやることだから反対してもしょうがない、みたいな雰囲気もあったんじゃないでしょうか。幸い当時の私の上司にはよく理解してもらえたというのも大きかったと思います。

それから、12月に投げ掛けてなぜ1月にできたかという点です。役所が仕事をするためのツールは大きく二つあります。予算と法律です。しかし、図書館海援隊を立ち上げるのに法律を変える必要はないし、お金は全然かかっていません。正確に言えばメールのやりとりの通信代ぐらいなものでしょう。また、これをやるために新たに人を採用する必要もありません。

その代わりに文部科学省として行ったのは、私が「この指止まれ」と言って手を挙げて下さった図書館に関する情報を集めてプレスリリース、すなわち記者向けの発表資料を出したことです。

高橋：当館でも、「これ文部科学省から依頼文がないの？」と言われました。でも、逆にそういういったものがなく草の根的に有志が集まったってところも重要だと思います。

神代：そのとおりです。国からこういうことをやって下さいと通知を流すようなやり方も当然これまではありました。でもそれでは「じゃあ言われたからやるか」みたいなところもひょっとしたら出てくるかもしれない。人に言われたからやりますよってという姿勢は、結局利用者のみなさんにすぐ見抜かれますよね。この人は本気で私の相談に乗ってくれているのかっていうのは利用者のみなさんが一番よく分かるわけですから、まずは「私たちはやる気になってやっていますよ」という図書館が集まってネットワークを作る。そしてやっていることについて情報交換してみんなでサービスを向上させていく。そういうことを狙ったんです。

高橋：草の根的というのがこの活動に合っていると思っています。一人一人へのサービスが集まって最終的には海援隊になるっていうニュアンスがすごく大事だと思います。1人の人にでも貢献できることはすごく大きなことです。

昨日もある人と話したのですが、グリーフケアのように、心の痛みを持っている人を癒

す本を提供できたら、自分の夢を追いかける人のために1冊の本を出してそれが前進につながったら、それはすごく大きいことだと思うんです。そういうことが集まってサービスができています。上からサービスをつくっていくのではなくて、今会場のみなさんがしている、昔から図書館でしている、人の役に立ちたいとか貢献したいっていう想いが集まって海援隊になっているのではないのかと思うんです。だから海援隊を草の根的に作って下さったこともすごくうれしかったです。

神代：ありがとうございます。海援隊が発足して以降、何か変化のようなものはお感じになりますか？

高橋：当館ではこの表を基にして「働く気持ち応援コーナー」を作りました。労働者の方のために書かれた本は図書館でもいろんな場所にあるのですが、それをまとめて提供できる棚です。労働者の方に必要な情報をワンストップで提供できて好評でした。それを応用して、子育てする人のための棚や高齢者を応援する棚も作り人気を集めています。海援隊から教えてもらったことが今の当館のサービスに生きています。

神代：この表の本当にすごいところは、ここに書かれている中身自体がもちろんすごいということもありますが、これが一つのモデルになっているということです。タイトルの中の「労働者の直面する問題」を別の問題に変えても図書館にできることはある。先ほど高橋さんもおっしゃっていましたが、いかなる社会課題であっても図書館にできることはあるんだということを、図書館の人たちがどれだけ自覚を持って日々の仕事に臨むか。ここが変わるだけでも日本の図書館はかなり大きく変わるのではないかという気がします。この表自体がそういった変化を生み出すとともに、さらなる変化を引き起こすフォーマットでもあるという位置付けができる。そういう意味でもすごいなと思っております。

さてそろそろ時間も迫ってまいりましたが、これからやってみたいことについての話はおそらく第2部にも出ますし、かと言って、幸先よく始まって図書館海援隊バラ色ね、みたいな感じで締めると、たぶん冷水がバシャーッと浴びせられる。

高橋：浴びせられますか。

神代：そういう場面もあろうかと思いますが。

高橋：恐ろしい。

神代：ですが、高橋さんとしてこれからこんなことをやってみたい、といったことがもしありましたら一言お願いします。

高橋：地道に1人の人を見てサービスをしていきたい。図書館の本で1人の人の命を救えたり、1人の人の人生が変わる可能性がある。それを教えてもらった海援隊としても、そ

ういう情報共有をどんどんしていきたい。各自治体で課題を見つけてそこに必要なものを届けて図書館がどんどん1人の人の役に立って行ければ日本も世界も変わる、そういう思いで仕事をしていきたいと思います。

神代：ありがとうございました。力強い決意表明をいただいたところで第1部を終了したいと思います。ご清聴ありがとうございました。